

2020 年度 センター試験 本試験 国語【解答】

問題 番号	設問	解答 番号	正解	配点	問題 番号	設問	解答 番号	正解	配点	
第 1 問 (50)	1	1	5	2	第 3 問 (50)	1	21	3	5	
		2	1	2			22	2	5	
		3	1	2			23	4	5	
		4	4	2			24	1	6	
		5	5	2			25	3	7	
	6	2	8	26			5	7		
	2	6	2	8		27	2	7		
	3	7	3	8		28	5	8		
	4	8	2	8		第 4 問 (50)	1	29	5	4
	5	9	2	8				30	3	4
	6	10	1	4			2	31	2	8
	11	4	4	3	32		2	8		
	12	1	3	4	33		1	8		
第 2 問 (50)	1	13	1	3	5	34	5	9		
		14	4	3	6	35	4	9		
		15	4	7	(注) — (ハイフン) でつないだ正解は, 順序を問わ ない。					
	2	16	2	8						
	3	17	5	8						
	4	18	2	8						
	5	19-20	3-6	10 (各 5)						

2020年度 センター試験 本試験 国語

第1問 評論

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	得意…15分 ふつう…20分 苦手…25分	河野哲也『境界の現象学』からの出題。	2019年度に比べて文章量が1000字程度減少し、時間的制約の厳しさは緩和されたといえる。馴染みのない「レジリエンス」という概念が登場したため戸惑った受験生もいるかもしれないが、提示される具体例を丁寧に読んでいくとその意味をつかむことができたろう。また、リード文で題材と論の方向性が明確に示されていることも、本文を理解する助けとなったと考えられる。 個別の設問についてみていこう。問2や問3では、本設問の主題「レジリエンス」と関連する語の理解が問われている。見慣れない語が複数登場したため、それらの違いや関係を正確に把握できるかがカギとなった。また、問5は、架空の生徒たちの対話を舞台に、本文の内容と合致する具体例を選ぶ問題である。次年度から始まる共通テストでは、「主体的・協働的に学ぶ力」が問われており、本文の内容を身近な経験と

傾向と対策

と絡めた設問は今後も出題されると予測される。
設問全体としては、分量が少なく本文中に具体例が豊富に示されていたほか、紛らわしい誤答選択肢も少なかった。そのため、解きやすいと感じる受験生が多かったと考えられる。よって、「やや易」と評価する。

本文解説

段落解説

I 「レジリエンス」の概要(第1～第6段落)

「レジリエンス」とは、「攪乱を吸収し、基本的な機能と構造を保持し続けるシステムの能力」のことである。もともと物性科学の用語であったレジリエンスは、近年さまざまな領域で注目されている。

60年代になると、生態学や自然保護運動において「生態系が変動と変化に対して自己を維持する過程」という意味でレジリエンスの概念が用いられ始めた。ただし、レジリエンスにおける「自己の維持」は、適度な失敗を前提に動的に変化し、環境の変化に適應する能力である。この点でレジリエンスは基準に戻ることの意味する「回復力」や、唯一の均衡点を想定する「サステナビリティ」とは異なる。

II 新たな分野での「レジリエンス」(第7～第11段落)

80年代になると、心理学や精神医学、ソーシャルワークの分野で「ストレスや困難に対処する抵抗力」や「不運から立ち直る心理的回復力」という意味でレジリエンスが用いられるようになった。たとえば、ソーシャルワーク

と教育におけるレジリエンスの重要性を主張したフレイザーは、従来の医学中心主義的な支援ではなく、患者を中心としたソーシャルワークを行った。フレイザーのソーシャルワークの特徴は、患者を支援する際に本人の自発性や潜在能力を生かすことに焦点を当て、結果と患者がレジリエンスを発揮できるような環境を構築することを目指したことである。

レジリエンスにとって重要な意味をもつ概念に「脆弱性」が挙げられる。回復力の不十分さを意味する「脆弱性」はレジリエンスとは正反対の概念とみなされることが多い。だが、変化や刺激への感受性を意味する脆弱性は、環境の悪化の察知を早めてレジリエンスを保つことに役立つため、高い価値をもつ。

さらに、近年では安全性を高める発想法として、エンジニアリングの世界で柔軟性に近い意味でレジリエンスが用いられている。レジリエンス・エンジニアリングとは、複雑な現実世界に対処するため、適度な冗長性をもつ組織の能力向上を目指すものである。

Ⅲ 「レジリエンス」を重視したケア（第12～第14段落）

レジリエンスの特徴は、自己と環境の動的な調整にかかわることである。レジリエンスは、人やシステム内部に備わる性質ではなく、自己を維持し環境に適応する目的で、環境との相互作用を変化させる過程で生じる性質だ。

レジリエンスは、ミニマルな福祉の基準として提案できる。福祉とは、個人が人間的な生活を送るうえで必要となるニーズを充足することだ。ニーズを充足するためには、他人から与えられるものを受け取るだけでなく、自身で能動的にニーズを満たす力を獲得することが求められる。

環境の変化に適応する力であるレジリエンスは、自己のニーズを能動的に充足する力であるともいえる。そのため、レジリエンスの獲得を最低限の福祉の達成基準とすることが可能だ。また、ケアする者は、変化する環境に個

人が能動的、自発的に対応し、自らのニーズを満たす力を獲得できるように支援しなければならない。

百字要旨

レジリエンスは自己や環境を動的に変容させつつ、環境の変化に適応する力である。福祉はケアされる側が自己のニーズを満たす力としてのレジリエンスを獲得できるような支援を行うべきだ。

87字

用語解説

― 出典：『広辞苑 第七版』（岩波書店）※○内は解説者注

攪乱 かき乱すこと。

均衡 二つ以上のもの・ことの間、つり合いが取れていること。

脆弱性 もろくて弱い性質。

ミニマル 最小の。最小限の。

システム 複数の要素が有機的に関係しあい、全体としてまとまった機能を発揮している要素の集合体。

生態学 生物の生活に関する科学。

環境 周囲の事物。特に、人間または生物をとりまき、それと相互作用を

及ぼし合うものとして見た外界。

自律（自律性・自律的） 自分の行為を主体的に規制すること。

福祉 公的扶助やサービスによる生活の安定、充足。（本文の一部においては、人々の生活を安定・充足させるために提供される公的扶助やサービス）

設問解説

問 1 1 5

正解 (ア) ⑤ (イ) ① (ウ) ① (エ) ④ (オ) ⑤

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 知識・教養

解説

難解な選択肢はなく、例年通りの難易度で出題された。

しかし、(イ)の正解である「小康(状態)」や、選択肢の「更迭」、また(ウ)の選択肢「堅固」など、日常生活であまり見かけない語も含まれており、思いつかざるのに苦労した受験生もいるかもしれない。配点が低く軽視されがちな漢字問題であるが、選択肢の語も含めて覚えておくと、正確かつスピーディーな読解の助けとなるだろう。表記や意味の定着があまりない単語に関してはきちんと確認し、語彙を増やしておくとうい。

解答選択肢

- (ア) 促進 ① 結束 ② 目測 ③ 捕捉 ④ 自足 ⑤ 催促
- (イ) 健康 ① 小康 ② 候補 ③ 更迭 ④ 甲乙 ⑤ 技巧
- (ウ) 権限 ① 棄権 ② 堅固 ③ 嫌疑 ④ 検証 ⑤ 勢力圏
- (エ) 偏って ① 編集 ② 遍歴 ③ 返却 ④ 偏差値 ⑤ 変調
- (オ) 頑健 ① 対岸 ② 主眼 ③ 岩盤 ④ 祈願 ⑤ 頑強

問 2 6

正解 ②

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 3分

設問パターン 内容説明型

解答範囲 (I) (第1～第6段落、特に第5～第6段落)

解説

本文のテーマ「レジリエンス」と、その類義語である「回復力」や「サステナビリティ」の意味の違いを問う問題。

これらの用語の意味の違いについては、第5段落(「回復力」と「レジリエンス」の意味を比較している)と第6段落(「サステナビリティ」と「レジリエンス」の意味の違いについて述べている)がおもに論じている。それではこれらふたつの段落をみていこう。

まず、第5段落2文目では「回復力」と「レジリエンス」について、回復が「あるベースラインや基準に戻ることを意味するのに対し、レジリエンスでは「必ずしも固定的な原型が想定されていない」とその違いを述べている。あとに続く二文からも、レジリエンスが「均衡状態に到達するための性質(＝回復力)」と異なり、「変化する環境に合わせて自らの姿を流動的に変更しつつ、環境への適応という目的を達成するための性質」であることが読み取れるだろう。

次に第6段落をみてみよう。第6段落では、「唯一の均衡点」があるのかのように期待されているサステナビリティに対し、レジリエンスでは「適度な失敗が最初から包含され」「健康なダイナミズム」つまり動きがあることが目指されている、と生態系を例に述べられている。続く文で「レジリエンス」の説明として挙げられている森林火災の例では、筆者は小規模の火災が森林の生態系に再構築・変化の機会をもたらし、破滅的な大火災を防ぐと述べている。これは、

このふたつの内容を総合し、筆者が考える「回復力・サステナビリティ」

と「レジリエンス」の違いについてまとめると、前者は特定の基準や均衡状態を目指す、後者は決まった基準を持たず、(ある程度失敗を重ねつつも)環境の変化に対応して発展していくことを目指すといえる。この整理を踏まえて選択肢を見ると、「戻るべき基準や均衡状態を期待する」「回復力・サステナビリティと、「環境の変化に応じて自らの姿を変えていくことを目指す」レジリエンス」という本文に即した対比が行われている②が正解である。

不正解の選択肢

- ① 「基準となるベースラインが存在しない」のは回復力・サステナビリティではなく、レジリエンスの説明である。また、レジリエンスではあるべき姿として特定の状態を想定しないため、「弾性の法則によって本来の形状に戻る」という説明も正しくない。
- ③ 「適度な失敗を繰り返すことで自らの姿を変えていく」というレジリエンスの説明はおおむね正しいが、「環境の変動に応じて自己を更新し続ける」のは回復力・サステナビリティではなくレジリエンスの説明である。
- ④ レジリエンスではそもそも均衡が想定されていないので、「均衡を調整する動的過程として自然を捉える」という後半の記述は正しくない。レジリエンスの観点から見た自然は特定の均衡を目指すものではなく、適度な失敗(例・小規模な森林火災)を繰り返し、自らを動的に更新しつつ目的(生態系の構築・維持)を達成するものである。
- ⑤ 前半部分は正しいが、レジリエンスの目的は「自己を動的な状態においておくこと」ではない。レジリエンスの目的は環境に適應することであり、動的に発展し続けることはその手段である。

問3 7

正解 ③

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 3分30秒

設問パターン 内容説明型

解答範囲 Ⅱ(第7～第11段落、特に第8～10段落)

解説

ソーシャルワークの場面におけるレジリエンスと、レジリエンスにとって重要な性質である「脆弱性」の関係を問う問題である。

選択肢をざっとみると、「近年のソーシャルワークの特徴」「ソーシャルワークにおいて脆弱性が果たす役割」「脆弱性がその役割を果たせる理由」の三つの部分から構成されていることが分かる。そのため、本文から各部分に対応する情報を読み取り、それぞれの選択肢と照らし合わせて正誤を判断すると正答を見つけやすいだろう。

第8段落最終文と第9段落では、レジリエンスに着目したソーシャルワークについて「患者の自発性や潜在能力に着目し、患者に中心をおいた援助を行う」「人間と社会環境の相互作用に働きかける」「クライアントの持つレジリエンスが活かせる環境を構築する」ものであると述べている。

そのうえで、第10段落では、一見「レジリエンス」と正反対に思える「脆弱性」は変化や刺激のセンサーとなるため、環境の不規則な変化や悪化に気付き、対応するのに役立つとして積極的な(プラスの)価値があると論じている。

これを踏まえて選択肢を見ると、「近年のソーシャルワーク→適応力を生かせる環境構築」「脆弱性の役割→非常時に高い対応力を発揮するシステム構築に役立つ」「脆弱性→環境の変化へのセンサー」と、三つのポイント

すべてで本文に即した説明がなされている③が正解である。

不正解の選択肢

- ① 誤り。近年のソーシャルワークにかんする部分は正しいが、脆弱性が「被支援者が支援者にどれだけ依存しているかを測る尺度となる」という趣旨の記述は本文にはない。また、本文において脆弱性は「環境の変化にいち早く対応する」ことに役立つ性質だと述べられており、「過度の依存が起らない仕組みを作る」という働きがあるとは読み取れない。
- ② 「環境に対する抵抗力の弱い人を支援する」が誤り。第9段落で述べられているように、近年のソーシャルワークはクライアントそれぞれがもつレジリエンスを活かすことを目指すものである。また、脆弱性は変化へのセンサーとして機能し、「変化の起こりにくい環境に変化を起こす刺激」ではない。

④ 「均衡状態へと戻るための重要な役割を果たす」が誤り。レジリエンスにおいては、戻るべき均衡状態は想定されていない。

⑤ 「人と環境の復元力を保てるように支援を行う」が誤り。「復元力(回復力)」は第5段落でレジリエンスと異なるとされている。(本文中ではレジリエンスの概念においても「回復力」という言葉が用いられているため、不思議に思った受験生もいるかもしれない。しかし、この意味の「回復力」は第12段落で述べられているようにシステムの相互作用では生じるため、人や環境などの内部に存在するものではなく、「人と環境の復元力」という表現は不適切である。)

問4 8

正解 ②

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 6分

設問パターン 内容説明型

解答範囲 〈Ⅲ〉(第12～第14段落、特に第13・14段落)

解説

「福祉」の基準としてレジリエンスを採用する、という筆者の提案の説明を問う問題である。選択肢はいずれも、「aを福祉における最小の基準とすることができ」「これ(一文目で述べた基準a)に基づいて、支援者にはbが求められる」という構造になっている。そのため、本問に解答するために「福祉における最小の基準として筆者は何を想定しているか」「この基準を踏まえ、支援者はどのような援助を行うべきか」という二点を読み取る必要がある。

筆者がレジリエンスを「ミニマルな福祉の基準として提案できる」と述べた傍線部は第13段落冒頭だ。傍線部の意味は少々分かりにくいだが、直後の「すなわち、ある人が福祉の目的である」により言い換えられているので、まずはこちらに注目してほしい。その後、福祉におけるレジリエンスについて記されている第13・14段落をみていこう。

第13段落では、福祉が「その人(被支援者)のニーズ(人間の生活のために必要なものを充足すること」と定義されている。本文ではニーズを充足するためには「他者から与えられるものを受け取る」だけでなく、「自身でそのニーズを能動的に充足する力を持つ」ことが必要だと述べられている。「そうでなければ」から始まる直後の文をみれば、筆者が継続的かつ自律した生活を想定していることが分かるだろう。短期的、依存的には他者のニーズ充足に頼って生きられないわけではないが、その状態で長期的、

自律的に生活することはほぼ不可能だ。(ここで、傍線部Cの直後にもう一度着目してほしい。個人が生きていくのは「変転する世界」であり、福祉は「人が変転する世界への適応力を身につけ、個人のニーズを充足できるようにすること」と言える。この福祉の定義に、レジリエンス(「自己を維持するために変化する環境に適応する能力」)を導入しよう。すると、レジリエンスと「変転する世界への適応力」は同じ意味と言えるため、福祉は「個人がレジリエンスを身につけ、それぞれのニーズを充足できるようにすること」とまとめることが可能だ。

また、第14段落で筆者はレジリエンスを「自己のニーズを充足するため、個人が持つべき最低限の回復力」と捉えている。これは、先程第13段落から導き出した福祉の定義と結びつけることができるだろう。その後筆者は、様々な理由で自己のニーズを満たせなくなった(レジリエンスを失った)個人に対しての支援のあるべき姿を論じている。物体と異なり能動的・自発的に自己を維持するべき生命(被支援者)に対し、支援者は「様々な変化する環境に対応しながら自分のニーズを満たせる力(「レジリエンス」)を獲得してもらうように、本人を支援する」べきだ、という意見が筆者の結論だ。

これを踏まえて選択肢を見ると、福祉における最小の基準(レジリエンス)を「個人が様々な環境に応じて自己の要求を充足してゆく能力」と正しく説明し、支援者は被支援者がレジリエンスを身につけるために補助するべきだ、という後半部分にも誤りがない②が正解となる。

不正解の選択肢

①前半部分では「主体的に対応できるシステム」が誤り。筆者が主張する福祉の基準はシステムではなく、個人が複雑な現実世界に主体的に対応する

能力(「レジリエンス」)を獲得することである。

また、後半では「社会体制を整備する」が誤り。本文の最終文では「したがって、ケアする者がなすべきは(中略)本人を支援することである」と述べられており、支援者が働きかけを行うのは社会ではなく被支援者である。

③後半部分はおおむね正しいが、「環境の変化の影響を受けずに」が誤り。第12段落最後の「レジリエンスは(中略)環境に柔軟に適応していく過程のことである」や、傍線部Cの直後の「すなわち(中略)そうした柔軟な適応力を持つようにすることが、福祉の目的である」から分かるように、変化する環境に柔軟に対応することが求められている。この選択肢の正誤を迷った生徒もいるかもしれないが、レジリエンスと環境の関係に注意して本文を読むと適切に判定できるだろう。

④前半は「満たすこと」が不適当。福祉の最小の基準とされているのは「ニーズを自ら満たす能力であり、ニーズが満たされることそのものではない。

また、後半では「被支援者のニーズに応じて満足してもらえないよう尽力する」が誤り。第13段落最後の二文「ニーズを充足するには(中略)継続的に送れないからである」を見てほしい。福祉活動の目的を達成するためには、被支援者がレジリエンス(「環境の変化に適応し、自発的に自己のニーズを充足する力」)をもつことが必要だと筆者は考えている。そのために支援者が行うべきは被支援者のニーズに応える事ではなく、被支援者がニーズを満たす力を獲得できるように手助けすることだと述べられている(第14段落最終文を参照)。

⑤「経済力を持つ」が誤り。筆者が本文中で提唱している「ミニマルな福祉の基準」としての「レジリエンス」は、自己のニーズを自力で満たすために必要な力であり、この「力」を経済力に限定するようなことを筆者は述

べていない。そのため、必要になる力は「経済力」のみとは限らない(例えば、孤独を感じている個人が「人との親密なかかわり」をニーズとしている場合、経済力のみで解決することは難しいだろう)。

問5 9

正解 ②

難易度 ★★☆☆

所要時間 3分30秒

設問パターン 空欄補充型

解答範囲 本文全体

解説

架空の生徒同士の会話を題材に、本文で述べられた「発展成長する動的過程」の具体例として最も適当なものを選ぶ設問である。空欄の直後で生徒Bが「なるほど。『動的』ってそういうことなのか。」と発言していることから、選択肢の例が「動的」を適切に説明しているかに注意する必要があるとわかる。

選択肢の吟味に移る前に、本文中の「動的」に関する記述を見てみよう。

第4段落では、レジリエンスの過程における「自己の維持」とは「環境の変化に対して動的にに応じていく適応能力」のことであると述べられている。

また、第5段落でも、「絶えず変化する環境に合わせて流動的に自らの姿を変更しつつ、それでも目的を達成するのがレジリエンスである」という記述がみられる。さらに第12段落では、レジリエンスについて「自己と環境の動的な調整にかかわる」「変化する環境の中で自己を維持するために、環境との相互作用を連続的に変化させながら、環境に柔軟に適応していく過程」

だと述べられている。これらの記述から、「発展成長する動的過程」とは、適応と目標達成のため、変化する環境に応じて自己(行動や思考など)を変容させていくことだということが分かる。

これを踏まえて本文の選択肢をみてみると、部活動で部長に就任した生徒が新チームの現状に合わせてやり方を変更したことで、チームが目標に向けてまとまりを持つことができたという体験が語られている②が正解である。ここでは新チームへの移行という環境の変化に対し、生徒が「やり方の変更」という形でチームを変容させ、結果的にチームのまとまりを得ている(つまり、目標達成・新しい環境への適応を成し遂げている)

補足しておく、この選択肢で語られている「以前のやり方を踏襲したのうまうまかかった」体験は、第6段落でレジリエンスに含まれるとされている「適度な失敗」の例といえるだろう。

不正解の選択肢

①「まったく経験のない競技を始めたけど、休まず練習を積み重ねた」という体験の中には、「動的過程」の具体的な説明となる、変化する環境に合わせて行動を変容させたという要素が含まれていない。よって誤り。

③誤り。「自由な発想を活かしていくことが大切」という内容は「発展成長する動的過程」に関する本文の記述から読み取れない。また、「ひとりひとりの個性」は動的過程とは無関係である。

④誤り。「将来のニーズを今から予想」という内容は本文から読み取れない。「発展成長する動的過程」において適応しようとしている環境は未来のものではなく、連続的に変化している現在のものである。

⑤誤り。「オンとオフの切り替え」の例は環境に適応しているといえるかも

しれないが、例から発展や成長の要素は読み取れず不相当である。

問 6 10 · 11

正解 (i) ① (ii) ④

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 内容説明型

解答範囲 へI(第1～第3段落)

解説

(i)

文章の表現について適当な説明を選択させる問題。言葉や文法の知識だけでなく、選択肢で取り上げられている表現が文章中でどのように使われているかに注目することが必要である。

①「としよう」という表現で筆者は仮定を表している。また、該当する部分を読むと、実際に船の中でコップ一杯の水を運んでいる部分が思い浮かぶだろう。よって、①は適当。

②「筆者が独自に規定した意味で用いている」が誤り。第4段落で規定されている「自己の維持」の意味は、実際に生態学や自然保護運動の文脈で用いられている。

③誤り。筆者が「サステイナブルな自然」という表現を「本来好ましくない」と思っていると読み取れる記述は本文中に存在せず、「といったときには」という表現そのものにもそのような意味を示唆する使い方はない。第6段落の最初の文では単に、「サステイナブルな自然」を例に挙げて「サステイナブル」に「レジリエンス」とは異なる意味が含まれることを示しているだけである。

④「患者に対する敬意を示す」が誤り。「あるとされ」の中に敬意を示す表現は用いられていない。

以上より、正解は①。

(ii)

本文の構成に関する説明として「適当でない」選択肢を選ぶ問題。

①第2段落ではウォーカーの「レジリエンス」に関する具体例を引用し、読者がこの概念を把握しやすいようにしている。また、第3段落では「レジリエンス」という概念を「攪乱を吸収し、基本的な機能と構造を保持し続けるシステムの能力」と筆者自らの言葉で説明して導入している。よって①は本文の説明として適当である。

②第5段落冒頭で筆者は「レジリエンスは(中略)そこにある微妙な意味の違いに注目しなければならない」と述べ、「レジリエンス」の類義語として「回復」と「サステナビリティ」を登場させている。その後、第5段落では「レジリエンス」と「回復」の意味の違いを説明し、続く第6段落で「レジリエンス」と「サステナビリティ」の差異について述べている。第5・第6段落の説明により、類似するほかの概念とは異なる「レジリエンス」の特質が明らかにされているといえる。よって、②は適切な説明である。

③第4段落では六〇年代に生態学や自然保護運動で用いられた「レジリエンス」の概念について説明している。また、第7段落では八〇年代に心理学や精神医学、ソーシャルワークの分野で「レジリエンス」がどのような意味で使われ始めたかを述べている。その後、第11段落では近年のエンジニアリングの分野で登場した「レジリエンス」の概念を解説している。

第7段落と第11段落の冒頭で用いられている「さらに」は、新たに情報を加える時に使われる接続詞だ。そのため本文では、新たな分野での「レ

「レジエンス」の使われ方を時代ごとに付け加える形で論の展開が行われているとわかる。このことから、「レジエンス」の概念は時間の経過に伴ってさまざまな分野に導入され、拡張された意味をもつようになったといえる。

したがって、「時系列順にレジエンスという概念の拡大を紹介する」という本文の説明は正しい。よって選択肢③は適当。

④ 第 1 3 段落冒頭で、今までさまざまな使われ方を紹介してきた「レジエンス」の概念が「ミニマルな福祉の基準として提案できる」という独自の見解を筆者は述べる。続く部分ではこの見解をくわしく説明している。他方で、選択肢にあるような「一般的な理解」を取り上げたり、「筆者の立場から反論」したりしている部分は第 1 3 段落にはみられない。よって、この選択肢が誤った説明である。

以上より、正解は④。

(小池優希、上岡公聖、衛藤健)

2020年度 センター試験 本試験 国語

第2問 小説

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	得意…15分 普通…20分 苦手…25分	原民喜の小説「翳」からの出題。	第二次大戦前後の日本を舞台に、妻を亡くした「私」が、かつて親交のあった魚屋の小僧「魚芳」の死を知り、生前の彼を回想するというのが基本的な内容である。妻や魚芳の死後の出来事を描いた部分に二人の生前を回想した部分が挟み込まれているという構成や、10年以上にわたる期間の長い回想に、読みにくさを覚えたかもしれない。しかし、作者が細かく明示している時系列に注目すれば混乱はなかったはずだ。特に「戦争の接近と進行」「魚芳の性格やふるまい（の変化）」のふたつの描写に注目すると、本文の理解がスムーズになるだろう。また、本文全体を通じて手紙が重要な役割を果たしている。手紙の内容だけでなく、手紙を受け取った「私」と妻の反応にも注目する必要がある。 設問については、判断に迷う選択肢が少なく、正答を選びやすい問題が多かった。例外は問2で、各選択肢が短く、それぞれの情報が少ないぶん、難易度が上がっている。

設問解説

問1

正解 (ア) ① (イ) ① (ウ) ④

難易度 ★★☆☆☆

解説

文中に出てくる語句の意味を問う問題。語句の意味を問われた際は、まず辞書に載っている意味に従うことが前提である。しかし、今回の(イ)のように、辞書的な意味に加え、その言葉が用いられている文脈も手がかりにする必要がある問題も存在する。そのような問題では、①辞書的な意味に明らかに反するものを候補から消す②単語の周辺の文をもう一度確認し、そこでの用法を判断する、という二つのステップを踏むとよい。

(ア)

「興じる」は「おもしろがる。興に入る。」という意味。「興ずる」ともいう。選択肢では①と④がこれに近い。さらに、傍線部「興じ合う」の「合う」に着目すると、「互いにする。ともに事を行う」という「し合う」の意味を含んだ選択肢が正しいとわかる。したがって、正解は①。

(イ)

「重宝」にはおもに「①貴重な宝物。大切なたから。じゅうほう。②珍重すること。大切に取り扱い扱うこと。③使って便利なこと。便利だと感じてよく使うこと」という三つの意味がある。これらの意味にだいたい合致する選択肢は①・③・④だが、辞書的な意味からはどれが正解か判断することができない。

そこで、傍線部の前後をしてみる。まず、傍線部を含む一文は、「炊事も

できるし、あの気性では誰からも重宝がられるだろう、と妻は時折噂をした」となっている(本文59・60行目)。この評価は、ほかの個所で「元気で小豆に立ち働いた」(本文45行目)といったふうに魚芳が勤勉な若者として描写されていることと結びつけて理解すべきだろう。つまり、この「重宝がられる」という言い回しには、熱心な若者という魚芳の性質は、軍においても重視されるだろうという妻の評価が表れているのだ。「尊ぶ」に込められた上位の者に対する敬意のニュアンスをここに読み込むのは難しい。

また、直前の「きつと魚芳はみんなにかわいがられているに違いない」という文も妻の「噂」の一部だと考えるのが自然だ。ここで「かわいがられている」と述べられている以上、「重宝がられる」もこれと矛盾しない意味で解釈すべきだろう。すると、「思いのまま利用される」という④は魚芳への思いやりが欠けた感じが強く、「かわいがられる」とニュアンスが食い違っている。したがって、魚芳をないがしろにした感じのしない(Ⅱ)「かわいがられる」とそぐう、①の「頼みやすく思われ使われる」が正解。

(ウ)

「晴れがましい」には「①いかにも晴れの場に立つ様子である。公的にふるまうさまである。②表立つなどしてはれやかである。はえばえしい。③あまりに表立っておもはゆい。きまりが悪い。」という意味がある。接尾辞「がましい」はもとの語に「らしい。ゝの風がある。ゝのきらいがある」という意味を加えて形容詞をつくる。「こ」では「晴れ」の「晴れがましいこと」や「表向き。正式。おおやけ。公衆の前。ひとなか。」という意味が形容詞になっている。選択肢のうち①②③にもっとも近い意味を述べているのは④の「誇らしく堂々と」。

なお、⑤の「すがすがしい表情で」と迷った受験生もいるかもしれない。しかし、ここでの「すがすがしい」は「さわやかで気持ちがよい。」という意味であり、人前に出る態度という意味あいが入らない。したがって「晴れがましい」の言い換えとしては不十分である。

問2

15

正解

④

難易度

★★★★☆

解説

傍線部の「私」の行動から、その背景にある心情を読み取る問題。

この問題を解くときに注意してほしいのは、不適当な選択肢を排除する方法だ。不適当な選択肢は、大きく分けると「本文と致命的に食い違う」と「本文に根拠がない」ものの二つに分類できる。

二種類のうち、簡単に誤りが指摘できるのは前者のタイプである。しかし本問では「本文と致命的に食い違う」(「本文中の描写と異なる」と断定できる)選択肢が少ない。そのため、いわゆる「本文には書いてないけどそれっぽい」選択肢に騙されないために、根拠をもって解答することがより重要になる。

まず、傍線部の内容を、傍線部が埋め込まれた場面とあわせて確認しておこう。傍線部は本文第2段落にある。最初の二段落では、魚芳の回想が始まる前、「私」が「一九九四年の秋に妻を喪った」(本文1行目)あとの数か月のことが語られている。死亡通知と悔やみ状のやりとりをしつつ日々を送る「私」は、「妻の遺骨を郷里の墓地に納め」たあと、千葉の借家で四十九日を迎える。続く二文では、この時期、「私」が妻の義兄の死を知ったこと、す

でに「サイレンが頻頻と鳴り唸って」いたことも語られている。そして傍線部もまたこの時期のことを述べた一文だ。

傍線部によれば、「私」は「そうした、暗い、望みのない明け暮れにも」「凝と蹲ったまま」妻と過こした月日を回想している。解答のうえではこの「にも」とその前後に注目するのが重要だ。

その前に、まず、「そうした、暗い、望みのない明け暮れ」とは何なのかを明らかにしたい。「そうした」という指示語が含まれているため、直前の部分に着目する。先に確認した通り、千葉で妻の四十九日を迎えた私は「妻の義兄の死」「(空襲の)サイレンが鳴り響く生活」に直面していることが8・9行目からわかる。位置・内容からみてこの二カ所が「そうした」の指示対象なのはまず間違いない。すると、「望みのない明け暮れ」とは、親戚の不幸や自分の身の危険がある、現在の「私」の日常の事だと読み取れる。

次に注目するのが、先ほどふれた「にも」である。この「にも」のニュアンスを理解することがこの問題を解くカギのひとつだ。この「にも」に込められているのは、大雑把に言えば「(普通くだけのところ、くだけではなく)それに加えて…であっても」という付け加えの意味あいである。これは、私たちの日常的な言葉づかいからわかる。たとえば、「彼は友人でない同級生にも優しくする」といったとき、そこではひとが友人に優しくすることは当然として、それに加えて友人以外であっても優しくすることが彼の特別さとして語られている。別の近い例として、「彼女はつらいときにもそばにいてくれた大切なひとだ」という文をみてみよう。友人や知人が楽しいときにそばにいてくれるのはふつうのことである。しかし、つらいときであっても近くにいてくれるのは特別なことだ。彼女はそんな特別な優しさの持ち主だったり、特別な関係にあったりする、大切なひとである。これがここで「にも」によって表現されていることだろう。

傍線部に戻ろう。「私」は「蹲ったまま」「妻と一緒にすごした月日を回想する」日々を送っている。こんなことができるのは、ふつう、穏やかな日常を送る余裕があるときだ。しかし、前段落で述べたように災難と隣り合わせの日常では、現実(戦局や自分の安全)に注意が向かうのが自然である。そんな「暗い、望みのない」日常であっても私は妻の回想に浸っている。つまり、今は亡き妻に強く執着しているあまり、「私」は現実に降りかかる現在の不幸に気を配ることができていない。これが傍線部で「にも」が表している意味あいである。適当な選択肢はこの重要な「にも」のニュアンスを汲み取っている必要があるだろう。

「顧みず」という表現によってこの「にも」のニュアンスをうまく拾ったうえで、「暗い、望みのない明け暮れ」および妻の思い出の執着という内容を捉えられているのは④である。

不正解の選択肢

①「私」が「恐怖にかられた」という内容が本文から読み取れないため誤り。また、「妻との思い出に逃避している」「私」が「安息を感じている」かどうかも本文からはわからない。「私」は現実が「望みのない明け暮れ」であることは理解している。したがって、それとわかる記述なしには、「私」が心安らかであると考えるのは難しいだろう。

②「妻との思い出を思い出せなくなる」という不安を示す描写はない。

③「生活への意欲を取り戻そうとしていた」が誤り。私は「凝と蹲ったまま」であり、どちらかと言えば無気力に近い状態である。

⑤「私」は妻を思い出させるかつての交友関係にこだわり続けていた」が誤り。確かに、傍線部より前の部分で知人との連絡のやりとりについてはふれられている。しかし、傍線部自体から明らかなく、私」がとら

われているのは交友関係ではなく、妻自身の思い出である。

問3 16

正解 ②

難易度 ★★☆☆

解説

傍線部で「私」の目に映った妻の様子から、「私」が推測した妻の心情を読み取る問題。魚芳たちの「になえつつ」の練習に対して妻が感じた「笑いきれない」理由を探すことが必要となる。また、問2と同じく、「致命的な誤りがある」というより「本文中に根拠がない」という形の不適当な選択肢が多く、すぐには正誤を判定しにくい。それゆえ、「本文中に書かれていないことを勝手に予測しない」事が非常に重要となる。

まず、傍線部が埋め込まれた場面を確認しておこう。傍線部があるのは、「ある日」の「南風が吹き荒んでものを考えるには明るすぎる、散漫な午後」(38行目)を描いた段落である。台所で談笑していた米屋の小僧、魚芳、「私」の妻の三人は、次第に小僧と魚芳も通う教練(軍事上の訓練)に話題を移す。二人は「になえつつ」の姿勢を「身につけようとして陽気に騒ぎ合」い、「私」の妻もそのこっけいさに「笑いこけていた」。しかし、「私」はその妻のように「笑いきれないもの」を見てとった。これが傍線部が埋め込まれた場面である。

この場面をみただけでは、「私」が妻の態度に「笑いきれないもの」を感じた理由はよくわからない。しかし、この段落の前後に視野を広げると、次のような描写に目が向くはずだ。

こうした、のんびりした情景はほとんど毎日繰返してたし、ずっと続いてゆくもののおもわれた。だが、日華事変の頃から少しずつ変っ

ていくのであった。

これは傍線部の場面の直前、本文32～34行目の記述である。詳細な説明は省くが、回想の始まる本文13行目から32行目までは、「私」が魚芳の存在を知り、顔見知りになってからの日々、「のんびりした」日々を描いている。しかし、この引用箇所によって「ずっと続いてゆくもののおもわれた」穏やかな日々が、けして「ずっと」続くものではなかった、ということが暗示されている。

この点に注目すると、傍線部の場面がもつ意味合いが少し変わってくるはずだ。いくらそのしぐさにおかしみがあるとはいえ、魚芳たちがやってみせ「になえつつ」は銃を肩にかける姿勢であり、軍事上の訓練の一つである。傍線部の直後の二文では、「私」の身近なひとたちが少しずつ兵役に携わっていく様が語られている。つまり、「になえつつ」のエピソードは戦争が、ひいては「のんびりした」日々の終わりが近づきつつあることを示すものなのだ。「私」が妻のようすに「何か笑いきれない」ものを感じたわけも、このエピソード全体の意味から考えると明らかになる。「私」は妻の楽しげな態度の裏に、妻もまた魚芳たちの行動におだやかな日常の終わりを感じ取っているのかもしれない。したがって、正解は「(近づくと戦争によって)平穏な日々が終わりつつあることを実感している」とする②である。

不正解の選択肢

①「気のはやりがあらわ」かどうかは不明だが、「そうした態度で軍務にこならば」以降が誤り。妻は「笑いこけて」おり、「になえつつ」を行ってふざけている魚芳たちを批判する気持ちはないと考えられる。

③「商売人として一人前になれなかった境遇にあわれみを覚えている」が誤り。妻が魚芳の商売人としての格を気にしていると読み取れる描写はない。

また、妻が魚芳をあわれんでいると判断できる根拠もない。

④「興じ合っている」ことを考えると、魚芳たちは「熱心に練習している」というよりも、「面白おかしく遊んでいる」といった方が正しい。また、『「になえつつ」の姿勢すらうまくできていない」かどうかを本文中から読み取ることはできない。

⑤「ふざけ方がやや度を越している」が読み取れず誤り。選択肢①の解説でも既述したように、もし「度を越している」と感じていたら不快に思うため「笑いこける」ことはないと考えられる。()

問4 17

正解 ⑤

難易度 ★★☆☆☆

解説

久しぶりに訪ねてきた時の「魚芳」の様子から、「私」たちへの彼の態度を読み取る問題。本文中で描かれている「魚芳」の人物像を手掛かりとする、彼の行動の意図をスムーズに読み取ることができると、

久しぶりに訪ねてきたにも関わらず「魚芳」が家の中に入らない理由を考える際、「私」夫妻と「魚芳」の立場の違いに注目する必要があるだろう。

「私」夫妻は魚屋「魚芳」を毎日のように利用する顧客だ。一方、「魚芳」は新潟から千葉に出て、魚屋で小僧として働く身である。魚芳にとって「私」夫妻は「得意先のお客様」であり、彼が裏口から現れた理由も御用聞きとしての立場をわきまえたものだと考えられる。(かつての日本の家には玄関と裏口の二つがあり、魚屋のような御用聞きは玄関ではなく裏口から入るのが一般的であった。可能な人はアニメ「サザエさん」の家や、御用聞きが勝手

口から声をかけるシーンを思い浮かべてほしい)

また、魚芳の性格として、「勤勉さ・我慢強さ(毎日長距離を自転車で行く、親方に包丁の使い方を教えてもらえなくても辛抱する)」「朗らかさ・愛嬌(筆者と会った時の「愉しげにニコニコしている」様子、犬にも好かれている)」などが挙げられている。その中でもここでは「礼儀正しさ」に注目してほしい。魚芳は海岸で会った「私」たちに帽子を取って挨拶し、兵士となった後も郷里から梨を(蛤の返礼として)「私」たちに送るような礼儀正しい青年として描かれている。

この二つから総合的に判断すると、魚芳は兵長になっても「得意先と御用聞きの小僧」という以前の関係性をわきまえ、礼儀正しく「私」夫妻に接しようとしていると考えられる。そのため、正解は⑤。

不正解の選択肢

①「兵長にふさわしくない行動だと気づき」が読み取れず誤り。魚芳は「兵長にふさわしい行動かどうか」より、「かつての『私』夫妻に対する立場」を気にしている。

②「再び勤め先に向かう途中で立ち寄ったので」が誤り。家にながらなかつたのは急いでいたからではなく、礼儀をわきまえた行動である。

③「後ろめたさを隠そうとしている」ので家にながらない、という因果関係は不自然である。また、「魚芳」は「私」夫妻からの蛤の缶詰に対し礼状を送り、年の暮れにも梨を返礼として送っているため「連絡を怠った」とも言い難い。

④病状が悪化している「妻」の姿を目の当たりにして驚いた、という趣旨の描写は本文中にない。誤り。

問 5 18

正解 ②

難易度 ★★☆☆☆

解説

何通が登場する「私」(または「私」夫妻)あての手紙をきっかけとした、「私」の感情の変化について問う問題。選択肢がそれぞれ異なる手紙について触れているため、選択肢間での比較を行うことができない。一つ一つ正誤を調べていこう。

① 「紋切り型の文面から共有し得ないことを知った」が誤り。「私」は本文 2 ～ 3 行目で「紋切り型の悔み状であっても、それにはそれでまた喪にしているものを鎮めてくれるものがあつた」と述べている。

② 正しい。川瀬成吉(魚芳)の死を知ったあとの回想シーンでは、魚芳の手柄や彼との交流をしのぶものとなっている。また、やや唐突に思われる「終戦後、私は郷里にただ死にに帰って行くらしい」という本文最終文は、本文 91 行目で「郷里に死にに還つた男」とされている魚芳の姿を、見かけた青年たちに重ねたものである。

③ 「立場が悪くなったと心配」が誤り。妻は魚芳が「誰からも重宝がられる」と考えており、「私」もそれに対して反対していない。

④ 「楽天的な傾向が」が誤り。魚芳たちの世代の感覚について触れた描写はない。

⑤ 誤り。「私」の推測においては、魚芳の「内地への失望」は内地へ一度帰ったことによるものである。また、本文で描かれている魚芳の人格から考えて、魚芳の返事の内容は「他人事のように語る」ものではなく、妻への共感や内地の変化への混乱した思いを示すものだと考えられる。更に、私魚芳に「不満を覚えた」事が読み取れる描写もない。

よって、正解は②。

問 6 19

正解 ③・⑥

難易度 ★★☆☆☆

解説

本文中の表現に関するものとして**適当でないもの**を選択肢から選ぶ問題。「たまたま誤っているものが二つ見つかったから」と他の選択肢を確認せずにいると、ミスがあつた場合に気付くことができない。やや手間はかかるものの、表現とその文中での効果を確認し、それぞれ正誤を判定していこう。

① 正しい。1 行目の「満州にいる魚芳」は人物(川瀬成吉)を示し、18 行目の「魚芳の小僧」の「魚芳」は店名である。川瀬成吉が勤め先の魚屋の名前で呼ばれていることは明示されていないが、これらの描写から彼が店名の「魚芳」で呼ばれている(川瀬成吉 || 「魚芳」 || 「魚芳の小僧」と判断できるだろう。

② 正しい。「魚芳の死の知らせを読む場面(12 行目・83 行目)」の間に「魚芳に関する回想(13 ～ 82 行目)」が挟まれ、「いくつかの時点を歩き来している」と言える。時が示されていることで、時点の変化が分かりやすくなっている。

③ 誤り。擬態語は使われているが、「ユーモラスに描かれている」とは言い難い。特に 90 行目の「とぼとぼ」は病を抱えた魚芳が死ぬために故郷に帰る、暗い場面である。

④ 正しい。回想シーンからは、魚芳の誰からも好かれる愛嬌(宿なし犬との関わり)や魚の頭を犬に与えたり、「私」たちに鴨を取ってきたりする優し

さが読み取れ、彼の人柄を浮かび上がらせるものとなっている。

⑤正しい。「吹き荒ぶ」とは、風が非常に激しく吹くことを意味する語句である。風や明るさの描写が入ることで、単に「思索に適さない午後」と書くより印象的な表現になっている。

⑥誤り。妻の病状と「私」の生活の厳しさには関連性がない。よって、正解は③と⑥である。

(小池優希、堤暁彦、上岡公聖)

2020年度 センター試験 本試験 国語

第3問 古文

難易度	所要時間	傾向と対策
★★★★☆	15分	<p>本文は読みやすい。登場人物が少なく、読解のために十分な情報を補ってくれる前書きもあるので、読み進めるうえであまり混乱は生じないはずだ。意味のとりにくい箇所・主語や目的語のわかりにくい箇所もいくつかあるが、大きな問題ではない。ていねいに整理すれば理解できるか、あるいは通読・解答のためにはあまり重要でないかのどちらかである。</p> <p>設問も標準的な難易度である。問1・2の単語・文法問題は平易。問3は正攻法で解こうとすると手間取る可能性があるが、消去法で考えれば難しくない。問4・5は古文に慣れた受験生からすれば「みればわかる」類の問だろう。解説では古文が苦手な受験生を想定していちから説明している。問題の性質上、問6は時間をかける必要があるが、この形式の設問の標準的な考え方を使えば解ける。ただし、正解の選択肢をまじめに検討すると意外と手間がかかるので、解説ではその点をくわしく説明した。</p>

現代語訳

「ここはどこか」と、お供の人びとに問いなさると、（お供の人びとが）「雲林院と申し上げる場所でございます」と申し上げるので、聞き耳を立てなさって、宰相が通うところだろうかと、このあいたはここに聞いたが、どこだろうかと、（宮は）知りたくお思になつて、お車を停めて外をご覧になったところ、どこも同じ卯の花とは言いながらも、垣根が続いているのも玉川のような感じがして、（自然豊かで）ほどどぎすの初音（がいつになるか）も心配しない場所だろうかと、興味深くお思になつて、夕暮れのころにであるので、静かに蘆垣の隙間から、格子などが見えるのを覗きなさると、こちらは仏の御前と見えて、閼伽棚はごぢんまりとして、妻戸や格子も押しやうて、桜の花が青々と散つて、花をお供えするといつて、からからと鳴る間も、それより後の仏事の勤めも、現世においても熱心に行い、来世は同じようにたいそう期待がもてることだ。仏道方面のことは気にかかることであるので、うらやましく見なさつた。つまらない世に、このようにも住みたいと、お目について見えなさつて見ると、子供の姿もたくさん見えるなかに、あの宰相のもとにいる子供もいるのは、（やはり姫君の庵は）ここだろうかと、とお思いなさるので、お供である兵衛督という者を呼び寄せなさつて、「宰相の君はここにお仕えしているのだろうか」と、対面したいと思うということを（中にいる宰相に）申し上げなさつた。（宰相は）驚いて、「どのようなしたらよいでしょうか、宮が、ここまで探して入りなさつていられるので、恐れ多いことです」といって、急いで（外に）出た。仏のそばの南面に、お敷物などひき繕つて、（宮を）入れて差し上げる。

（宮は）ほほ笑みなさつて、「このたび探し申し上げると、このあたりにいらつしやるなどと聞いて、ここまで分け入ります愛情を、思い知つてくだささい」などとおつしやるので、「まことに、ありがたくも探し入りなさつた御愛情は、恐れ多いです。老人が、寿命に苦しみます様子なので、見遂げましょうと思つて、籠つて」などと（宰相が）申し上げると、「（尼上が）そ

のように(体調を崩して)いらつしやることは、気の毒でございます。そのご病状もお伺いしようと思つて、わざわざ参上したのに」などとおつしやるので、(宰相が)中へ入つて、「これこれのお言葉があります」と申し上げなされると、「そのような者がいるとお耳に入つて、老いの果てに、このようになすばらしいお恵みをいただくことが、長生きする命も、今はうれしく、この世の名誉と思われれます。人づつでなく申し上げようと思ひますが、こう弱しいようすで」などと、息も絶え絶え(尼上が)申し上げているのも、(宮は)たいそう理想的だと聞きなさつてゐる。

人々が覗いて見申し上げると、はなやかに輝いてゐる夕月夜に、動作をなさる気配は、似るものもないほどすばらしい。山の端から月の光が輝き出ているようである。ご様子は、直視できないほど(りっぱ)だ。優美さも華やかさもこぼれるほどであるお着物に直衣がちょっと重なつてゐる色の調和も、どこに加わつてゐるうつくしさだろうか、この世の人が染め出したようにも見えず、ふつうの色にも見えない様子、模様も本当にめずらしい。よくないもの(器量のすぐれない男性)さえ見慣れない気持ちであるのに、「世にはこんな人もいらつしやるのだなあ」と、感心しあつてゐる。本当に、姫君に並べたいと思つて、(女房たちは)笑つてゐる。宮は、(姫君の)住居の様子などをご覧になると、(そこは)ほかとは様子が異なつて見える。人は少なくしんみりとして、ここに物思いにふけてゐるような人がすんでゐる。よらかな心細さなどは、気の毒に思われて、むやみに物悲しく、お袖も涙で濡らしなさりつつ、宰相にも「きつと、(くの)効果があるように意識して(…を)申し上げてください」などと語らつて帰りなされるのを、人々も名残多く思う。

正解 (ア) ③ (イ) ② (ウ) ④
難易度 ★★☆☆☆

重要な単語・文法事項が含まれる語句の解釈を問う設問。傍線部を品詞分解したうえで、単語・文法に注意して現代語訳する。

(ア) ゆかしく／おぼしめし／て

解説

「ゆかしく」は形容詞「ゆかし」の連用形。「ゆかし」は「①興味がひかれる・見たい・聞きたい・知りたい」②恋しい・慕わしい」を意味する重要な古語。基本的な意味は「興味がひかれる」で、その対象にあわせて訳語を考える。「おぼしめし」はサ行四段活用動詞「おぼしめす」の連用形。「おもふ」の尊敬語で「お思いになる・お考えになる」などと訳す。同じく「おもふ」の尊敬語である「おぼす」「おもひたまふ」に比べて高い敬意を表す。以上を踏まえると傍線部は「興味深くお思いになつて」などと訳せる。これに該当するのは③。

「ゆかし」の意味を考えたととき、①の「いぶかしくお思いになつて」も訳としてはありうると考えるひともいるだろう。「いぶかしく」思う気持ち、言い換えれば不審に怪しむ気持ちは、「興味がひかれる」とか「気になる」といった気持ちのひとつだからだ。しかし、「ここ」で「ゆかしく」を「いぶかしく」と訳すのはふたつの理由から難しい。

まず、「ゆかしく」を「いぶかしく」と訳した場合、傍線部の前後の内容からみて不自然になる。前書きにある通り、本文は「偶然その(姫君が尼上と暮らす)山里を通りかかった宮が、ある庵に目をとめた場面」から始まる。傍線部が含まれる第一段落一文目は、まさに宮が庵に目をとめたときの

設問解説

問 1

21

5

23

様子を描写している。庵を目にした宮が「ここはいつくぞ」||「ここはどこか」と庵の正体を「御供の人々」に尋ねると、「御供の人々」は「雲林院」と答える。返答を得た宮は「御耳とどまりて」、「宰相が通ふ所にやと、このほどはここにこそ聞きしか、いづくならん」とゆかしくおぼしめす。「と」で結ばれていることから「宰相がいつくならん」が「ゆかしく」思う気持ちの具体的な内容であることは明らかだ。「宰相がいつくならん」の箇所は、おおよそ「宰相が通う所（＝姫君の暮らす庵）はここだろうか」という内容を述べている。前書きにある通り、姫君が、いま自分のとおりがかった「寂しい山里」に「祖母の尼上と暮らす」ことを宮はすでに知っている。とすれば、目の前にある庵が「宰相が通う所」だろうか、という宮の疑問に、「なぜこんなところに宰相の通う所があるのだろうか」などといった、いぶかしく思う気持ち、不審に思う気持ちはないと考えるのが自然だろう。

第二に、一般に「ゆかし」は古語「いぶかし」と区別される。「いぶかし」には「①心が晴れない②もつと知りた③不審だ・疑わしい」という大別して3つの意味がある。②をみれば「ゆかし」と「いぶかし」は近く思えるが、③にあるように、「いぶかし」は不審・不明なことを明らかにしようとする気持ち強い。これに対して「ゆかし」は、②の意味があるように、興味をそそられる・愛着を感じる対象に心がひかれる様子を表している。したがって「ここで「ゆかし」を「いぶかしい」という意味で訳すのは難しい。

(イ)

解説

「やきり」「は」「そつと・おもむろに」という意味を表す重要な古語である。これに該当するのは②。

(ウ) 重なれ／あはひ

解説

「重なれ」はラ行四段活用動詞「重なる」の已然形。「重なる」は自動詞なので、他動詞「重ねる」と区別する。「る」は存続・完了の助動詞「り」の連体形。「あはひ」は①間隔②間柄③（色・物・人の）組み合わせ・配合④都合・形勢」を意味する古語。①②の意味を「間」としてひとまとめに覚えて、あとは③の意味をおさえておけば受験のうえでは十分だろう。傍線部の直前を見ると、「艶も色もこぼるばかりなる御衣に、直衣はかなく重なるあはひ」とある。この箇所の正確な意味はわからなくても、「御衣」と「直衣」という2種類の衣服が重なっている様子を描写したものだということとはわかるはずだ。とすると、2種類の衣服の「色の組み合わせ」という③の意味でこの「あはひ」は解釈すべきだろう。これに最も近いのは④。

問2

24

正解

①

難易度

★★★★☆

解説

本文で用いられた敬語のうち4つについて、その敬意の方向を問う設問。古文に慣れた受験生なら直観的に解くこともできる問題だが、「ここ」では、慣れていないひと・順序だてて・確実に正当するための考え方を紹介する。ある敬語の個別の場面における敬意の方向は、次の順序で考えるとよい：

①問われている敬語の種類（尊敬語・謙譲語・丁寧語）を特定する

②各敬語の種類ごとの敬意の方向（尊敬語ならば主語、謙譲語ならば目的語、

丁寧語ならば発話の相手）を考える

③②がこの場面では具体的に誰にあたるかを考える

以下、各a～dについてみていく。

a

古語「奉る」には本動詞と補助動詞の用法がある。本動詞の場合「①献上する②参上させる」という謙讓語の用法と、そこから派生した「①召し上げる②お召しになる③おなりになる」という尊敬語の用法があるが、補助動詞の場合「～申し上げる」という謙讓語の用法しかない。ここでの「奉る」は動詞「入る」に接続している補助動詞なので謙讓語である。謙讓語は行為や感情の対象(目的語)に対する敬意を表す。「入れ奉る」の目的語は宮なので、「奉る」は宮への敬意を示している。

「入れ奉る」の目的語(＝宮)は本文中で直接明示されていないので、この点を解説しておく。波線部をふくむ第一段落は、宮が姫君たちの暮らす山里の庵を来訪した場面である(前書きを参照)。庵の様子をながめていた宮は、たくさんいる子どもたちの中に、姫君と縁の深い宰相に仕える子どもたちの庵を見つける(同段落3文目「童べの姿も～童べもあるは」)。宮は宰相がこの庵にいることを知り、御供の兵衛督を通じて「対面すべきよし」＝「対面せよという旨」を告げる(同段落3文目「ここにや～聞こえ給へり」)。宮からの伝言を受けた宰相は「驚き」、「いそぎ出」、南面に「おましなどひきつくるひて」「入れ奉る」(同段落4・5文目)。4・5文目は主語が明示されていないが、宮が宰相との会見を望み、兵衛督つてにその旨を伝えたという3文目の内容を踏まえれば、その伝言を受け取った宰相の反応を描写したものだと思われるのが自然だ。3文目の宰相の独り言にあるように、宰相は宮の来訪を「かたじけなく」思っている。その宰相が「おまし」を「ひきつくるひて」＝勅物を用意して迎える相手は、常識的に考えて、宮しかない。

b

古語「給ふ」には四段活用のもと下二段活用のものであり、前者は尊敬の意を、後者は謙讓の意を表す。古語「ものす」はさまざまな動詞の代用として用いられる重要な語だが、自動詞の場合とりわけ「①いる・ある②行く・来る③生まれる・死ぬ」の用法が重要である。「ものす」はここでは「このわたり」＝庵に「いる」という①の意味で用いられている。謙讓語補助動詞「たまふ」は話し手の知覚や思考(「見る」「聞く」「思ふ」)についてのみ用いられるので、ここでの「たまふ」は尊敬語である。尊敬語は行為者(主語)に対する敬意を表す。「このわたりにも少し給ふ」の主語は庵にいる人々、つまり姫君・宮・宰相たちなので、「給ふ」は彼女たちへの敬意を示している。

c

古語「侍り」には本動詞と補助動詞の用法がある。本動詞の場合、「お仕える」という謙讓語の用法と「あります・おります」という丁寧語の用法があるが、補助動詞の場合は「～ます・～ございます」という丁寧語の用法しかない。ここでの「侍る」は本動詞「わづらふ」に接続している補助動詞なので、丁寧語である。丁寧語は会話の聞き手・文章の読み手に対する敬意を表す。波線部を含む発言は宮に対する宰相の発言なので、「侍る」は宮に対する敬意を示している。

この問題についてはそれほどではないが、古文における主語特定には独特の難しさがあるので、この点を少し述べておく。ほかの段落と比べたとき、段落全体に占める地の文の割合が極端に小さい第2段落は、複数の人物による言葉のやりとりを描写した段落といえるだろう。しかし、それぞれの発言を誰がしたのかということは直接述べられておらず、「申す」「仰せらる」と

いった発話を表す動詞の主語はすべて省略されている。これは、どの発言が誰のものかということは読者にとって「みればわかる」ことであり、わざわざ言葉にして述べることはないと作者が判断したからだ、と考えるのがひとまず自然だ。そして事実、古文が読めるひとにとって、それぞれの発話が誰のものかということはほとんど直観的に（＝理屈っぽく考えずとも）わかる。第2段落の場合、ひとは次のような個所をみて、難なく・考えることなく「このやりとりは宰相と宮のやりとりだ」ということを理解している…

① 第1段落で「宮が宰相との会見を望み、宰相は宮を部屋に入れた」ところまでが描写されている

② 第1段落の地の文において、宮に対しては一貫して敬語が用いられている一方、宰相に対してはそうではない

③ 第2段落のやりとりにおいて、一方の発話には尊敬語が、もう一方の発話には謙譲語が用いられている

④ それぞれの発話のおおよその内容

しかし、①～④を「みて」、第2段落のやりとりが宮と宰相の会話だということが「わかる」からといって、それを順序だてて・ほかの可能性がないということが説明できるというわけではない。ふつうひとが文章を書くとき、省略されている主語は読者にとって「読めばわかる」ものとして省略されるのであって、「推理してわかる」ものとして、さらにいえば「推理によってたどりつき・論理によって正当化できる」ものとして省略されるわけではないからだ。古文が読めるひとは、（筆者が意図したとおりに）みてわかるというこの能力を、意識的な訓練や論理的な思考を通じて獲得するわけではない。古文を読むうちにいつのまにか身につける。したがって、省略された主語の特定が苦手な人は、解説に対して「省略された主語が何であるかを順序だてて推理し、理屈によって正当化する方法」を求めるべきではない。解説

を書く人が古文を「読んでわかる」人が、本文のどこをどう「みて」いるかを見習おうとするべきだ。

d

古語「聞こゆ」は敬語以外にも重要な用法があるが、敬語としては「言ふ」の謙譲語としての用法しかない。謙譲語は行為や感情の対象（目的語）に対する敬意を表す。「聞こえ給へば」の対象は「老人」なので、「聞こえ」は「老人」への敬意を示している。

第2段落五つ目の「さる者あり」から始まる発言は、第2段落四つ目の発言（＝波線部「聞こえ」の発言）を受けたものだと思えるのが自然だ。①「老いの果て」「ながらへ侍る命」といった発言の内容②「ただえ聞こえたる」という発言時の様子から、「さる者あり」は「老人」の発言だということがみとれる。したがって、傍線部「聞こえ」の目的語も「老人」だということになる。

問3

25

正解 ③

難易度 ★★☆☆☆

解説

登場人物の心情について、その対象を問う問題。設問文はたんに「何に對して」となっているが、実質的には「どのような理由で」も同時に問われている（これはこの種の心情にかかわる問題一般にいえる）。したがって、傍線部の意味を把握したあと、近くにその理由を表現している部分を探すという解き方になる。

あらかじめ述べておくと、本問には次のふたつの解き方がある…

① 正攻法だが多くの受験生にとって現実的でない解き方

② 邪道だが受験生にとって現実的な解き方

この解説ではまず①を説明したあと②を説明する。このため、解説前半はすこし難しい内容になるが、できる限りやさしく書いたつもりなので、ぜひ目を通してほしい。

文やある程度まとまった長さの語句が設問で参照されている場合、まず引かれた部分の品詞分解と現代語訳を考える。傍線部を品詞分解すると「うらやましく/見/給へ/り」となる。「給ふ」は八行四段活用動詞「給ふ」の已然形。「り」は存続・完了の助動詞「り」の終止形。主語・目的語は省略されているが、それぞれ宮・庵であることは容易にわかる。すでに解説でもふれたとおり、第1段落は宮が姫君の暮らす山里の庵を来訪する場面である。傍線部が含まれるのは同段落2文目だが、直前の同段落1文目後半（「やをら 蘆垣の隙より」と頼もしきぞかし」にて、宮が覗き見る庵の様子が描写されていることから、傍線部も「うらやましく宮が庵の様子を」覧になっている「様子」を描写したものだともみなすのが自然だ。

設問は、宮が庵の様子をみて「うらやましく」思う理由を問うている。傍線部の直前を見ると、原因・理由を示すために用いられる接続助詞「ば」がある。そこで、まずはこの「このかたは心にとどまることなれば」という部分に注目すればよいとわかる。この部分を傍線部と同様品詞分解すると「この/かたは/心/に/とどまる/に/とどまれば」となる。「心にとどまる」はひとまとまりで「興味がひかれる」という意味を表す。「なれば」は断定の助動詞「なり」の已然形。已然形接続の「ば」は順接確定条件、つまり①なので、から②と・たととろ③といつも「を」を表すが、「こ」では原因・理由を示す。

難しいのが「このかた」である。受験生のほとんどは知らないだろうが、「このかた」には①「こちらの方向」・②「こちらの側」それ以来「という辞書的

な意味がある。ここでの「このかた」が①②どちらの用法だとしても、まず

「この」が指示する対象を特定する必要がある。指示語の指示対象はふつうその指示語の近くから探す。今回の場合、第1段落1文目の終わりのほうに、「このかたのいとなみも頼もしきぞかし」とある。傍線部直前の「このかた」とこちらの「このかた」は非常に近い場所であり、別々のものを指すとは考えにくいので、「このかたのいとなみ」のほうの「このかた」の指示対象がわかれば、傍線部直前の「このかた」の内容もわかるはずだ。

「いとなみ」も「このかた」同様あまり受験生にはなじみのない単語かもしれない。古語「いとなみ」には①仕事②準備③（仏事の）お勤め」の三つの意味がある。ここでは③の意味でとるのが自然だ。第1段落1文目の後半では、「仏の御前」「この世」「後の世」といった仏道関係の語がよく用いられていることが根拠となる。すると、「このかたのいとなみ」は「こちらの方向のお勤め」もしくは「それ以来のお勤め」となる。後者の意味でとった場合、「それ以来」といわれるような「それ」にあたる出来事が本文に示されておらず、意味が通らない。したがって前者の意味でとる。このとき、「このかた」＝「こちらの方向」が指す対象としては、「仏道方面」以外にはもっともらしい解釈はありそうにない。これを同段落2文目の「このかた」に当てはめると、「仏道方面のことは興味がひかれるので、宮はうらやましくと庵の様子を」覧になっている」となり、問題なく意味が通る。

この解釈に最も近いことを述べているのは③である。

しかし、この考え方は多くの受験生にとってハードルが高いだろう。確かに、解説ですでに述べた通り、理由・原因を示す接続助詞「ば」に着目し、「このかたは心にとどまることなれば」の意味を考えようというのがこの問題のすなおな解き方だ。だが、「このかた」「いとなみ」といった、重要語とはいきれない単語の意味を知らなければ解けない、というのも少しつらい。

そこで、すなおな解き方がわかっているにもかかわらず、その解き方は自分の手に負えないと思ったときは、消去法に頼るのも重要だ。③以外の選択肢は、(センター国語のあらゆる不適当な選択肢と同様) 次のふたつのうち、どちらかの欠陥をもつ：

- ・ 本文から読み取れないことを述べている
- ・ 本文から読み取れることを誤って理解している

このふたつを意識しながら、残りの選択肢の問題点を指摘する。今回の場合、各選択肢が問題にしているのが傍線部以前の第一段落の内容だということとは明らかなので、あらかじめこの内容を整理しておく、次のようになる：

① 宮は庵に興味をひかれ、車を止める(「ここはいつくぞう見出し給へる(一)」)

② 宮は庵の様子を外からながめ、その趣深さにいつそう興味をひかれる(「いつくもくゆかしくおぼしめされて」)

③ 宮は庵のなかを覗く。「仏の御前」の様子をみる(「夕暮れのく頼もしきぞかし」)

それでは各選択肢の検討に移ろう。①は「味気ない俗世から離れ」および「極楽浄土のように楽しく暮らすことのできる」が不適当。前者は先の整理のうち②もしくは③について述べていると思われるが、どちらも「味気ない俗世」とは対比されていない。後者は③について述べていると思われるが、熱心に仏事にうちこむ様子の描写から「極楽浄土」のような楽しさを読み取ることはできない。

②は「姫君とく心に決めていたので「および」いつもくうらやましく思っている」が不適当。①く③の整理からわかる通り、「ここまでの箇所で宮がそのような決意をもっている描写はいっさいない。また、「姫君のそばにいる

人たち」にかんする言及もない。

④は「来世のことをくうらやましく思っている」が不適当。⑤をみればわかる通り、姫君は来世の安楽のために仏事にいそしんでいる。

⑤は「自由に行動できない身分である自分」が不適当。そのような描写は本文にない。

問 4

26

正解

⑤

難易度 ★★☆☆☆

解説

第二段落後半の尼上の発言の意図を問う問題。まず傍線部を品詞分解・現代語訳したうえで、尼上の心情が読み取れる箇所を傍線部の近くから探す。

傍線部を品詞分解すると「つてならでこそ申すべく侍るに」となる。「つて」は「①ことつて・人つて②ものついで・たより・手がかり」の意味。ここでは意味が通るのは①の「ことつて・人つて」。「なら」は断定の助動詞「なり」の未然形。「で」は否定を表す接続助詞。「こそ」は強意の係助詞。「べく」は当然の助動詞「べし」の連用形。「侍り」は丁寧語補助助詞「侍り」の連体形。「に」は重要な接続助詞。現代語訳すると「人つてでなく申し上げるのが当然ですのに」または「人つてでなく申し上げるのが当然です」となる。

「申し上げる」の主語は当然尼上。他方、尼上が「申し上げる」相手はこの時点ではまだわからない。また、「に」の意味もこの時点では順接か逆接か判別できない。尼上が直接相手に話しかけている場合は順接「ですので」、そうでない場合は逆接「ですので」が適当になる。

まず、尼上がこの発言をしたときの場面を整理する。第二段落の前半は宮

と宰相の会話である。最初の宮の発言に対して、「若い人の、限りにわづらひ侍るほどに」と尼上の体調不良を話題に出した宰相に、宮は「不便に侍り」「その御心地もつけたまはらんとて、わざと参りぬるを」と尼上を氣遣ってみせる。段落後半、この宮の発言を宰相が尼上に伝えると、尼上は「さる者ありとて、かく弱弱しき心地に」と応じる。この発言を聞いて「いとあらまほし」と感じた人物は、明示されていないが、「給へり」と尊敬語が用いられていることから宮だとわかる。

この整理からもわかる通り、尼上が何を思っているかを知る手がかりとしては、傍線部を含む尼上の発言を見るしかない。段落前半のやりとりにおいては、尼上の病状が話題になっているものの、その心情に言及する発言はない。したがって、尼上の心情を知る手がかりとして利用できるのは、段落後半の尼上の台詞のみである。

そこで今度は、尼上の発言を整理する。まず、尼上の発言のうち、一文目（「さる者ありとておぼえ侍れ」）は①宮に対する感謝を述べている。また、傍線部を含む二文目が述べているのは②自分が人づてでなく宮にものをいうのが当然である③自分は体調を崩しているという二点である。この①②③の内容を踏まえると、この発言のもっとも自然な理解は、「①宮の来訪・氣遣いはたいへんありがたい。したがって②本来は自分が直接宮に挨拶すべきだ。しかし③自分は体調を崩している（のでそうすることができない）」というものになるだろう。これにもっとも近い内容を述べているのは⑤である。

①は「本来であれば、申し上げるべきだ」が不適当。すでに確認した通り、尼上が「かかるめでたき御めぐみ」といって反応したのは、尼上を氣遣う宮の発言である。「こ」では宮と姫君の関係についてはそもそも問題となっていない。

②は「この折に姫君のことを直接ご相談申し上げたい」が不適当。①でも述べた通り、ここで姫君のことは少しも話題になっていない。

③「宮から多大な援助をいただける」が不適当。宮は尼上を心配して庵を訪ねたとはいつているが、援助を行うか否かといったことは述べていない。

④「元氣なうちに直接お教え申し上げたかった」が不適当。第二段落の一連のやり取りにおいて、姫君が話題になっていないのと同様、宮の仏道修行にかんしても一度も話題にのぼっていない。

問5 27

正解 ②

難易度 ★★☆☆☆

解説

姫君の女房たちが「笑みゐた」る心情について問う問題。傍線部の意味を理解したうえで、「女房たちの心情」を考える手がかりになる部分を、傍線部を含む一文から傍線部を含む段落へと視野を広げつつ探す。傍線部を品詞分解すると「笑みゐたり」となる。「ゐ」は「行上」一段動詞「ある」の連用形。補助動詞としての「ある」は「続ける」などと訳す。「たり」は存続の助動詞「たり」の終止形。したがって訳は「ひたすら笑んでいる」などとなる。

次に、「女房たちの心情」を考える手がかりとなる部分を探す。まず、傍線部直前に「げに、姫君に並べまほしく」とあるので、この箇所注目する。逐語訳すると「本当に、姫君に並べてみたい」となる。この時点では、誰を・どういう理由で「姫君と並べたい」のかがわからない。そこでさらにみる範囲を広げる。

傍線部にいたるまでの第三段落の内容を整理すると、次のようになる…

① 人々、宮の様子を覗き見る（1文目前半「人々のぞきで見奉るに」

② 宮の美しさの描写（1文目後半「はなやかに」～3文目「めづらかなり」

③ 人々、宮の美しさを称賛する（4文目「わろぎだに」～めでまどひあへり）
 このように整理すると、「げに、姫君に並べまほしく」女房達が思っている
 相手は宮であり、その理由は宮の美しさに感嘆したからだろう、ということが
 がわかる。これに当てはまる選択肢は②。

①は衣装に注目している点が不適当。確かに第三段落3文目は宮の衣装の
 美しさを描写している。しかし、ほかの部分で称賛されているのは「うちふ
 るまひ給へるけはひ」「山の端より月の光輝き出でたるやうなる御有様」で
 ある宮自身である。特に、女房たちの心情を直接述べた「世にはかかる人も
 おはしませり」という箇所が「人」に注目している以上、賞賛の対象を衣
 装にしぼって理解するのは不適当だ。また、女房たちが「普段から上質な衣
 装は見慣れている」という記述も本文にはない。姫君たちが暮らすのが「寂
 しい山里」（前書き）であることを踏まえると、選択肢のこの記述はむしろ
 本文と不整合である。

③は「姫君が」と想像して「が」が不適当。女房たちが想像しているのは「宮
 と姫君がいっしょにいるところ」を「自分たち」がみることであって、「宮」
 を「姫君と自分たちがいっしょに」みることではない。

④はすべて不適当。すでに整理してみせた通り、女房たちは宮の美しさに
 関心を寄せている。宮を仏道に導くことへの関心はまったく述べられていな
 い。

⑤もすべて不適当。前半の「これまで平凡な男とさえ縁談がなかった姫君」
 は第三段落4文目「わろぎだに見ならはぬ心地なるに」を誤って解釈してい
 る。この部分を逐語訳すると「よくないものさえ見慣れていない気がするの
 に」となる。「だに」は「ここで」。二人の身分的なつりあいを気にかける描写

は存在しない。さらに、姫君と宮が一緒に並ぶ姿を想像して女房たちがよい
 気分になっている様子を描写したのが傍線部を含む一文である。この裏に
 「あきれ」を読み込むことを可能にする根拠は本文には存在しない。

問6 28

正解 ⑤

難易度 ★★☆☆☆

解説

本文の具体的な語句や文を指示せず、「この文章の内容に関する説明とし
 て最も適当なもの」を選ばせる設問。センター古文定番の問題形式である。
 このタイプの設問は、特定の一部分をよく読み込めば適当な選択肢と不適当
 な選択肢を見分けられるようになっていない。とはいえ、本文全体と各選
 択肢を漫然と見比べても、時間が多くかかったり、複数の選択肢がもつとも
 らしく見えてきたりと、望ましくない事態になる。そこで、このタイプの問
 題を解くときには次の三点を意識的にこなそう…

- ① 各選択肢を複数の要素に分けて、各要素について適当・不適当を考える
- ② 各要素が問題にしている内容が書かれた本文の箇所をみる
- ③ 不適当な要素は「本文にない」もしくは「本文に反する」ことを基準に

判断する

①～③は本文読解を問うたいの設問に通用する考え方だ。しかし、普通
 の設問であれば、これらをも特に意識せずとも傍線部とその近辺をよく読めば
 簡単に解答できることが多い。他方、この問6のような問題の場合、時間を
 かけすぎず・かつ自信をもって解答するためには、この三点を意識すること
 が重要だ。以下、各選択肢を検討していく。

①は「宮は美しい女性を見た」および「この人こそ確信した」が不適

当。確かに、宮が庵のようすを覗き見る様子は第一段落1文目で描写されている。また、庵に暮らす人物（「姫君？」）がふだん熱心に仏事にいそしむ人物であることは、1文目の後半ではめかされている。しかし、宮が見たときの「仏の御前」に「美しい女性」がいたという記述は存在しない。また、「美しい女性」を宮が見た描写が存在しない以上、当然その女性が姫君だと確信したという記述もない。

②は「宰相は、兵衛督を呼んで尋ねた」および「尼上と姫君がいる南向きの部屋に案内した」が不適當。宰相が宮を招き入れる様子は第一段落の3～5文目で描写されている。前者については、確かに、兵衛督から宮の来訪を伝えられた宰相の「いかがし侍るべき」という発言はある。しかし、これを兵衛督への質問や相談として理解することは少し難しい。宮からの伝言を受け取りこの発言をした宰相が「いそぎ出」ていること、そして兵衛督とやりとりした描写なしに宮を迎え入れる用意をしていることから判断すると、「いかがし侍るべき」は宰相の独り言と考えるのが自然である。後者については、まず、南面の部屋に姫君がいるという描写はない。また、尼上が南面の部屋で宮や宰相と同席しているというのは、第二段落の記述に反する（問4の解説を参照）。

③は「尼上は頼んだ」および「姫君についても懇願された宮は」および「姫君との関係が予感を覚えた」が不適當。尼上の発言は第二段落の後半の一カ所だけだが、この発言は、宮への感謝およびにもかかわらず直接対面できない事情を述べたものであり、姫君と宮との関係にはいっさいふれていない。

④は二文目が不適當。確かに、仏道の勤めがきちんと行われているという点で宮が庵をうらやましく思う描写はある（問3参照）。しかし、宮がこの山里で出家することを望む描写は本文にはない。

⑤が適當である。まず、「宮はくこのような（山里のような）寂しい場所で暮らしている姫君に同情し」に対応するのは第三段落6文目～7文目前半。ここで、宮は姫君の暮らす「所の有様」を見て、その「ひとしくしめじめ」としたようすに、「もの思はしからん人の住みたらん心細さ」を想像し、「あはれに」|| 気の毒に思っている。次に、「必ず姫君に引き合わせてほしいと宰相に言い残した」に対応するのは同段落7文目後半「宰相にも、くなど語らひて帰り給ふを」である。ここで宮が宰相にいった台詞「かまへて、かひあるさまに聞こえなし給へ」を逐語訳すると「必ず、効果があるように意識して申し上げてください」となる。ここで宮が望む「かひ」|| 「効果」が何の効果であるか、本文に直接は述べられていない。しかし、①宮が姫君に想いを寄せており（前書き参照）、かつ②宮が姫君のことを気にかけて、涙を流す様子が直前に描写されていることから、姫君との交際にかかわる「かひ」|| 「効果」であることがわかる。「女房たちはくひたっていた」に対応するのは同段落7文目末尾「人々も名残り多くおぼゆ」である。同段落前半で「人々」|| 女房が宮の美しさに感嘆していたこととあわせて考えると、「宮のすばらしさを思い、その余韻にひたっていた」という記述はぴったり当てはまる。

（上岡公聖、小池優希、衛藤健）

2020年度 センター試験 本試験 国語

第4問 漢文

難易度	所要時間	傾向と対策
★★☆☆☆ 得意… 15分 普通… 20分 苦手… 25分	六朝時代(三世紀～六世紀)の詩文選集「文選」からの出題。漢詩の出題は久々であり、押韻や対句法など漢詩ならではの知識を必要とする設問も散見されたため、漢詩に取り組んでいた受験生とそうでない受験生で出来に差があったことが考えられる。 漢詩の知識を問う設問の他にも、四つのイラストの中から本文の情景描写に即したものを選ばせる問題など新傾向のものがあった。要求されていたのは漢文の基礎的な読解能力だが、未知の問題を既存の知識の応用で解決する力をみる共通テストへの布石であるように見受けられる。 形式の変化が予想される中で受験生が準備としてできるのは、これまでのセンター試験対策と同じように漢文の基本事項の網羅を反復的な練習によって目指すことである。センター試験の過去問等を、形式慣れの手段としてではなく、漢文を読む題材として数多く読みこなすことが重要である。それによって、あまり慣れない形式の問題にも柔軟に対応できる力が身につくだろう。	

本文解説

書き下し文

樵隱俱に山に在るも 由来事同じからず
 同じからざるは一事に非ず 痾を養ふも亦た園中
 園中 氛雑を屏け 清曠遠風を招く
 室をトして北の阜に倚り 扉を啓きて南の江に面す
 潤を激めて井に汲むに代へ 樞を挿めて墉に列るに當つ
 群木既に戸に羅り 衆山亦た窓に對す
 摩迤として下田に趨き 迢遞として高峰を瞰る
 欲を寡なくして勞を期せず 事に即して人の功罕なり
 唯だ 蔣生の徑を開き 永く求羊の蹤を懐ふ
 賞心忘るべからず 妙善冀はくは能く同にせんことを

現代語訳

木こりと隠者はどちらも山にいるが
 その理由は同じではない。
 同じでないのは一つのことだけではない。
 都の生活で疲れた心身を癒すのもまた、庭園のある住居である。
 庭園のある住居は俗世のわずらわしさを遠ざけ
 清らかで広々とした空間は遠くの風を招き入れる。
 土地の吉凶を占って住居を建てる場所を決め、北の丘の近くに住居を建て、
 扉を南方の河川に面するように開いた。

谷川をせき止めて井戸の水を汲む代わりとし
権を植えて垣根として連なるようにする。

家の周辺の樹木は扉に連なり

山々もまた窓に迫っている。

うねうねと連なり続く下方の田畑に赴き

はるか遠くの高い峰を見る。

欲を抑え、都での生活のような苦勞は望まず

自然の摂理に従って、人の手はかけ過ぎない。

ただ蔦生の小道のような道を庭に開いて

蔦生にとっての求仲や羊仲のような友人の来訪をずっと待っている。

美しい風景をめぐる心を忘れてはいけない。

この上ない幸福として願うのは、友とこの景色を楽しむことができることだ。

設問解説

問 1

29

 /

30

正解 (ア) ⑤ (イ) ③

難易度 ★★☆☆☆

解説

送り仮名のない漢字の読みを答えさせる設問。本問では傍線部の漢字の正しい読み方となる選択肢がそれぞれ一つであったため、比較的容易に解答できたかもしれない。しかし、漢字の正しい読みをしている選択肢が複数個になると問題の難易度は上がる。本問はもちろんそうした難しい問題の解き方として、まず傍線部の漢字の意味や読み方から選択肢を絞り、その後本文中でその漢字の使われ方を考えるというアプローチが役立つ。

(ア)

「俱」は⑤「ともに」と読む。このことを知っていればすぐに正解が分かるが、この知識がなくても正解を導ける。「俱」は「一緒に」「両方とも」ともにする。「同じ」といった意味を持つ漢字である。また、本文で「俱」は直後の「在る」という動詞を修飾しており、副詞として用いられていることがわかる。前述の「俱」の意味の中で副詞のはたらきをするのは「一緒に」と「両方とも」であり、選択肢の中でこれらに近い意味を持つのは⑤「ともに」であると推測することができる。なお、木を切って生計を立てるために山に住む木こりと俗世を離れることが目的で山にこもる隠者とは山に住む目的が異なり、生活する上での接点も考えにくいいため、「こ」では「一緒に」ではなく「両方とも」という意味でとらえるべきである。

⑤以外の四つの選択肢は、いずれも「俱」の読みではない。①「たまたま」と読むのは「偶・適・会」である。②「つぶさに」は「詳しく」という意味を持つ語で、漢字では「具に・備に」と書く。「俱」と「具」を混同させないように注意しよう。③「すでに」は「既に・已に」と書かれる。④「そぞろに」は「漫ろに」と漢字が当てられ、「特に理由もなく」という意味を持つ。

(イ)

③「すくなくして」が正解である。基礎的な知識事項のため時間をかけずに正解を見つけたいが、こちらも(A)と同様のアプローチで考えることができる。「寡」の意味には、「寡黙」や「寡人(王や諸侯が自分を謙遜する際に用いる一人称)などの熟語から推測できる「少ない」「少なくする」といったものに加え、「弱い」「やめめ(夫に先立たれた女性)という意味の名詞)」もある。本文での「寡」のはたらきをみると、「欲を」寡「となつて」いることから、「欲を」という目的格に続く動詞となつてゐることがわかる。「寡」の動詞的な意味は「少なくする」があり、これは「欲を少なくする」すなわち「欲を抑える」といった意味で整合性のとれた解釈ができる。よって、③「すくなくして」を選ぶことができるはずである。

①「いつはる」は「偽る・詐る」と書く。「偽装」など「本当ではないこと」を言う(する)から転じて、漢文では「だます」という意味で用いられることが多い。②「つもの」は「募る」である。漢字の形が似ているために出題されたと思われるので、区別はきちんとしておこう。④「がへんずる」は「肯んずる」で「承諾する」という意味を持ち、⑤「あづける」は現代語の通り「預ける」と書く。

問2

31

正解

②

難易度

★★★★☆

解説

返り点の付け方と書き下し文の正しい組み合わせを答えさせる設問。センター試験では頻出の形式である。この形式の問題では、まず全ての選択肢を概観し、正誤の分かれ目になる部分に目星を付ける。傍線部を見た段階で文の構造が全くわからなくても、選択肢同士の共通点や相違点が考えるべき部分を見つけるヒントになることがある。その上で、各選択肢における書き下し文の文法的な誤りを探して正解の候補を絞る。返り点の付け方から誤りを探すよりも、古典の知識を用いて書き下し文の不備を見つける方が容易である。文法的な誤りのない選択肢が複数あった場合には、前後の文を現代語訳し、それらと傍線部の解釈との整合性を調べる必要がある。

本問では、漢詩の第二句と第三句の両方の解釈が問われている。まずは、第二句について選択肢全体を概観してみよう。①・②の末尾が「同じからず」、③・④・⑤の末尾が「同じうせず」となっている。他の箇所は同じ読み方をしているため、この「同じ」の用法が第二句における正誤の分かれ目であることがわかる。「同じからず」は「同じ」というシク活用の形容詞未然形+打消の助動詞の形であり、「同じではない」という意味になる。よって、ここでは「(木こりと隠者が山で暮らす)理由は同じではない」という解釈ができる。一方で、「同じうせず」は「同じうす」という形容詞+サ変動詞の複合動詞が打消の助動詞によって否定された形で、「(く)を共有しない」という意味になり、こちらは目的語が必要になる。③・④・⑤の選択肢において、「由来事は」となっていることから、「由来事」の部分は主格として解釈されている。よって、文中に目的語が存在していない。目的語が省略されている

可能性を探っても「(木こりと隠者が山で暮らす)理由はAを共有しない」という違和感の残る日本語解釈になり、Aにあたるものも見つけられない。したがって、③・④・⑤は第二句の解釈が成り立たない。正解は①か②のどちらかとなる。

次に、第三句に着目する。第二句で正誤の判断に用いた「同じ」という語がここでも登場するが、①の「同じうせず」には「一事を非とする」という目的語がある。②の「同じからざるは」も、「同じからざる(こと)は」と名詞が省略された形であり、文法的に正しい。第三句においては「不同」の部分の文法事項は正誤の分かれ目にならない。つまり、残っている①「一事を非とする」と②「一事に非ず」のどちらが正しいかが判断のポイントになる。この二つの文で用法が異なるのは、「非」という漢字である。「非」の用法として漢文を勉強する受験生がまず考えるべきは、体言を否定する「〜にあらず」である。②は「同じでないのは一つのこと(だけ)ではない」という解釈ができる。①のように「非」を「非とする」と読むケースは漢文ではあまり見られないが、解釈をあてるのであれば「(〜を)悪とみなす」といった訳になる。この場合、「一つのことを悪とみなすことを共有しない」という解釈ができ、どちらも文法的に誤りはない。①、②には文法的な誤りがないため、前後の文との整合性を調べる必要が生じる。ここでは、先ほど訳語を作った第二句と並べてみよう。すると、①は「(木こりと隠者が山で暮らす)理由は同じではなく、一つのことを悪とみなすことを共有しない」という解釈になり、第二句と続けた際に文意がとりにくくなってしまふ。一方で②は「(木こりと隠者が山で暮らす)理由は同じではなく、同じでないのは一つのことだけではない」という解釈になり、「木こりと隠者が山で暮らす理由として、異なっている点がいくつかある」という文意がとれる。したがって、正解は②である。

問3

32

正解 ②

難易度 ★★☆☆☆

解説

漢詩の内容に合致した風景を、似たようなイラストの中から選ぶ設問。センター試験の漢文としては珍しい形式であったが、漢詩の解釈が正しくできていれば容易に正解を導くことができる。

まずは落ち着いて、文章の選択肢が並んでいる場合と同様に、各イラストの違いを見つけよう。すると、「水を得る手段は井戸を汲むことか川からの引水か」「家の周辺にある垣根をなしているのは木々か塀か」「垣根の扉は南の川の方を向いているか東を向いているか」の三点が、四つのイラストの中の相違点であることがわかる。ここまです設問から読み取れたら、本文から各相違点のうち正しい方を決める根拠を探す。

本文を最初から見ると、第八句に「扉を啓きて南の江に面す」という記述が見つかる。これは「南側の河川に面するように扉を開いた」という訳になることから、垣根の扉が南の川の方に向いている②か③のイラストが正解であるとわかる。

正解の候補を②と③に絞ることができた。よって、調べる必要があるのは②と③の相違点になるが、前述の水を得る手段と垣根となっているものの両方が②と③でことなるため、どちらか一方を確定できれば正解にたどり着くことができる。第八句の続きを見ると、第九句に「澗を激めて井に汲むに代へ」とある。これは「谷川をせき止めて井戸の水を汲む代わりにした」という解釈になることから、川から水を引く様子が描かれた②が正解と決まる。なお、垣根の種類についても第十句「槿を挿ゑて墻に列るに当つ」で植物の槿を垣根としていることがわかる。より自信をもって②と解答できるように

なるため、時間に余裕がある場合には両方を確認するのが確実である。

問4 33

正解 ②

難易度 ★★☆☆

解説

漢詩中の空欄補充の設問。一般的に、漢文の空欄補充問題の考え方は以下の三つに大別される。

- (a) 句形(不能(あたはず)など)の一部の漢字が欠けている
- (b) ルールに従った押韻(漢詩の場合)

(c) 文脈から、既出の語や既出の語と対句になるもの(漢詩の場合)が入る
 まずは(a)(b)を考えて、それだけで解答の導出が難しければ文脈に依存する
 (c)の可能性を探るのがよいだろう。

本問では五つの選択肢すべてが名詞になっていることから、空欄Cが(a)の句形の一部になっているとは考えにくい。ここでは、漢詩の句の末尾が空欄であることを踏まえて、押韻を問う設問であることに気づきたい。本文の詩のような五言詩では、偶数句の末尾で押韻するのが決まりとなっている。七言詩では偶数句に加え、第一句でも押韻することを覚えておこう。押韻が問題のポイントであることがわかったところで、偶数句の末尾の音読みを調べてみる。すると、「ou(オウ)」「u(ウウ)」のどちらかの響きで押韻していることがわかる。したがって、空欄Cに入る漢字はこのどちらかの音読みを持っている必要がある。選択肢の中で、「モン」と読む④「門」および「ゲツ」と読む⑤「月」は正解とはならない。

解答の候補は①、②、③に絞られたが、押韻の条件からはこれ以上正解を限定できない。「ここからは、(c)のアプローチを行うことになる。漢詩の問題

の場合、まず確認するべきは対句法である。対句とは、文法構造が同じで内容が対応している(例：山は高く、海は深い)、平行に並んだ二句のことを指す。この詩の場合、空欄Cの含まれる第十句は、縦に並んだ第九句と対句になっている可能性が高い。第九句の構造に着目すると、返り点の付け方が第十句と等しく、文法構造は同じになっている。内容を見ると、第九句「木々はもう扉に連なり」は、隠者となった作者が自然と極めて近い位置に住居を構え、自然の中で暮らす様を描いたものである。第十句がこれと対句になるような空欄Cを考える。自然物の「山々」に迫っているのは、同じ自然のものである②「空」や③「虹」ではなく、第九句の「扉」と同じく住居の一部(人工物)である①「窓」とするのがよい。これによって、作者の住居と自然の関係が両方の句で述べられる形となり、第十句は文法構造・内容の両面で第九句と対応関係を持つことになる。

問5 34

正解 ⑤

難易度 ★★☆☆

解説

漢詩の表現に関する説明の正誤を判断させる設問。「適当でないもの」を選ぶ形式の問題では、すべての選択肢を見ないままに誤っているものを断定する解答方法は賢明ではない。一つ一つの選択肢に正誤の根拠を探す手法がより確実である。だが、選択肢単体を見ただけでは正誤がはっきりせず保留にせざるを得ない微妙な記述があることも多い。その場合には、五つの選択肢の相対的な比較が必要である。また、漢詩の表現に関する設問では、傍線部に押韻や対句といった形式的な表現技法が使われていないかを確認する習慣をつけておくとよいだろう。本問で気付くべきは、傍線部Dの二つの句

が対句になっているということである。ここまでの整理がついた段階で、それぞれの選択肢を見ていく。

五つの選択肢を見ると、①と③、②・④・⑤の文章の構造が似ていることがわかる。まずは①と③について内容の吟味をおこなう。①は第十三句、③は第十四句に関する説明である。この二句が対句であることを事前に理解していれば、双方の表現に対して同じような説明がなされることに納得がいくであろう。「靡迤」「迢遞」は読み仮名の通り響きの近い語の連続になっており、事物の繰り返しを想起させる効果がある。これによって情景が果てしない広がりを持っている。したがって、「どこまでも続く田園風景」や「はるか遠くの山々」という解釈において特に誤ったところはない。

次に、選択肢②・④・⑤に目を向ける。いずれも対句に関連した説明であるという点は共通しているが、注目する箇所が②・④・⑤で異なる。これら三つの指摘箇所はすべて第十三句・第十四句で対応しており、対句として構成されているという前提に誤りはない。ここでは、「対句として構成されることによって」に続くそれぞれの部分を調べる必要がある。

②の「住居の周辺が俗世を離れた清らかな場所」であるという記述は、第十一・十二句の大自然の中に家がある描写から正しいとわかる。よって、②の記述は誤っていない。

④については、垂直方向と水平方向の両方の要素を本文から見つける必要がある。垂直方向に関しては、「下」田と「高」峰という漢字からもわかるように、高低差がはっきりとイメージできる。水平方向についても、「靡迤」で山のふもとの田が連なる様子、「迢遞」で山が近くから遠くまで続いている様子が表現される。両者が奥行きを持った空間の広がりを感じさせる描写になっていることが読み取れる。④の記述にも目立った誤りは見られない。

⑤の説明には、いくつか疑問が残る。田畑に対しては「趨く」という動作

が書かれている。これは、遠くの山は見やるだけだが、田までは足を運んでいることを意味しており、高峰よりも下田の方が作者にとって身近な存在と考えられる。また、作者が田畑で耕作をしているという言及はないが、山々と同様に遠いものとなった(＝耕作をしていない)とも詩の中に書かれてはいない。作者が耕作から遠ざかっていると断定することには無理があるだろう。他の根拠としても、作者が都から故郷に帰って隠居したという前書きから、作者にとつての「世俗」は都での暮らしのことを指している可能性が高いことが読み取れる。したがって、田畑の生活の一部である耕作を「世俗」と分類することに関しても、本文とのずれが生じている。以上より、他の選択肢の正しさおよび⑤の欠陥の多さを踏まえると、⑤が適切でない選択肢だといえる。

問6

35

正解 ④

難易度 ★★☆☆☆

解説

漢詩に込められた作者の心情を問う設問。この問題も、設問文から考えるべき内容を具体化した上で取り掛かりたい。漢詩において作者の心情が問われた場合、最後の二句に思いが表現されることが多い。設問文には「この詩の結びに込めた心情」とあるが、このような誘導がなくても漢詩の主題を問われた場合には最後の部分に目を向けるのがよい。この設問を解く際に重要なのは、最後の二句の精緻な解釈をおこなうことである。なお、選択肢を先に読んでしまうと主題を探す際に選択肢に引っ張られてしまう可能性がある。選択肢は全体を一読して共通点を見つける程度にとどめ、まずは自分で筆者の心情を考えた方がよいだろう。多くの場合、自力で導いた主題にピン

ポイントで合致する選択肢が後から見つかるはずである。

まず選択肢全体を概観すると、すべての選択肢が漢の蔣生の逸話と関連付けられており、美しい風景を見ることと、友人への願いについて言及する形をとっていることがわかる。

傍線部Eの解釈をおこなう。直訳すると「美しい風景をめぐる心を忘れてはいけない。この上ない幸福として願うのは、一緒にすることができるとだ。」となるが、これでは「一緒にする」の部分が非常に曖昧である。ここで、蔣生の逸話との関連を思い出してほしい。蔣生は自宅の庭に小道を作り、そこに友を呼んで美しい風景を一緒に見た。第十七句にあるように、この詩の作者も庭に小道を作っている。ここから読み取れるのは、独りで隠遁生活を送っている作者も、蔣生と同じように庭に友人を呼んで美しい景色を共に見ることを望んでいるということである。したがって、第二十句の「一緒にする」は「友と一緒に美しい景色を見る」だという解釈が成り立つ。同時に、このことが作者の願いであると考えられる。

主題に当たりを付けたところで、これに合致する選択肢を探す。選択肢はすべて「美しい風景を仲間と一緒に眺めた際に起こること(かつ蔣生の逸話に当てはまること)」「前半部分と「友人たちへの願い」の後半部分に分かれている。前半部分に関しては、蔣生が友人と風景をどのように眺めていたかに関する記述がないため、各選択肢を否定する根拠にはならない。一方で、後半部分については先ほど読み取った作者の心情と重なる部分を探すことができる。「自宅で友人と一緒に美しい風景を見たい」という作者の願いに合致するのは、④の「どうか我が家においでください」である。前半部分の「楽しさがしみじみと味わえる」との因果関係もはっきりしているため、④が正解となる。

(堤暁彦、小池優希、上岡公聖)